武蔵野日曜集会　祈祷会
生命の言
――ヨハネ第一書１章――

１９７５年６月８日（武蔵野）
小池辰雄

生命の言　キリストとの交わり　キリストと一つ　イエスの贖罪の血　自分をキリストの十字架の中に投げ出す　祈り

【ヨハネ一１】

1 太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち生命の言につきて、2――この生命すでに顕れ、われら之を見て証をなし、そのかつて父と供に在して今われらに顕れ給える永遠の生命を汝らに告ぐ――3我らの見しところ、聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの交際に与らしめん為なり。我らは父およびその子イエス・キリストの交際に与るなり。4これらのことを書き贈るは、我らの喜悦の満ちん為なり。

5我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。6もし神と交際ありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理を行わざるなり。7もし神の光のうちに在すごとく光のうちを歩まば、我ら互いに交際を得、またその子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。8もし罪なしと言わば、これみずから欺けるにて真理われらの中になし。9もし己の罪を言いあらわさば、神は真理にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給わん。10もし罪を犯したる事なしといわば、これ神を偽者とするなり、神の言われらの中になし。

●生命の言

では、ヨハネ第一書です。ギリシア語を勉強するときも、ヨハネ書簡というのは一番とつきやすい。これは学問的に多少は問題はありますけれども、使徒ヨハネの書簡とみていいでしょうね。

1太初より有りし所のもの、

「太初に言あり」というような言い方と似たような気持がある。

我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち

生命の言につきて、

だから、ヨハネ伝の初めに非常に似ている。

「生命の言、言に生命があった」

という。ヨハネ伝1章をちょっと開きましょうか。ヨハネ伝も、ヨハネのものと必ずしも学者は言いませんけれども、内容的には非常に似ている。ここでは言、光ですね。それから生命です。

「1**太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**

言は神的なものであった。

2**この言は太初に神とともにあり、**

あるいは、「神の前にあり」と言ってもいいですが、

3**万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。**4**之に生命あり、この生命は人の光なりき。**」（ヨハネ1・1～4）

と。「生命」（ライフ）、それから「光」（ライツ）、両方ともLですけれども。それから、あとに「愛」という言葉が――ここにはいきなり出てきませんが――

「恵みに恵みが加えられる」

という、1章16節に「恵み」という言葉があります。これは「愛」に通じます。このヨハネ書簡になると、あとの方で「愛」がたくさん出てくる。言葉の使い方においてもヨハネ伝第1章とヨハネ書簡の第1章は非常に通ずるものがある。ここにも「光」が出てきます。「真理」も出てきます。そういう意味で、ヨハネ伝第1章とヨハネ書簡の第1章が非常に呼応していることを忘れないようにしてください。

「太初より有りし所のもの、……即ち生命の言」

とあるでしょ。生命をもった言、即ち、もちろんキリストのことです。この「言」はキリストです。それがキリストだから、

「我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの」

と言って、キリストと非常に親しい交わりのうちにあったことがここにも出ているわけです。これはむしろ、キリストが親しく触ってくださった。それは按手のことです。それが本当の実在で、太初より「有りし所のもの」「ホ・ヘーン」という、本当の存在者です。何ものにもよらない。ただ父と共にあったところのもの、また父の中にあったところのものです。イエス・キリスト自身が神さまの言を聞き――

「心の清き者は神を見ん」

という――神さまを見、そして、神の手によって彼自身が聖霊の按手を受けている。だから、このキリスト自身が

「つらつら神の言を聞き、神を見、神に触れていた」

ひとです。そういうもうひとつの奥を私たちはここにおいて読みこまなくてはいかんと思

う。

これが正に「太初なるもの」です。そして、非常に霊的な具体的な存在です。それが「生命の言」、生命を持った言です。

●キリストとの交わり

2――**この生命すでに顕れ、**

これは正に啓示です。啓示宗教ですから。即ち、キリストにおいて顕れた。

われら之を見て証をなし、

復活の証人である。

そのかつて父と供に在して今われらに顕れ給える永遠の生命を汝らに告ぐ――

――

これはヨハネ伝が「永遠の生命」と言う。「神の国」とか「天国」とかいう代わりに、ヨハネ伝は「永遠の生命」です。だから、「永遠の生命」なんていう言い方も正にヨハネ伝と一緒なんです。

そういう非常に具体的なキリストに、私たちは具体的に触れている。その具体性が相対的な具体性からもっと霊的な具体性になるためには、御霊によって聞き、御霊によって見、御霊によって触れる世界です。

3**我らの見しところ、聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの交際に与らしめん為なり。**

「我らの交際」というのは、キリストと交わっている我らですから、単なる人間的なただの交わりではない。正にこれはキリストとの交わりで、交わりの中心はキリストであるということを忘れないようにしてください。我々の「コイノニア」という交わりも、キリストを中心にして、キリストを中に立てての交わりであります。これはいわゆる「社交」というような交わりではない。キリストの生命に与る交わりですから。私たちの交わりも、

「お互いに交流しながら、キリストの生命により深く与っていこう」

という交わりです。

我らは父およびその子イエス・キリストの交際に与るなり。

この父、御子との交わりに与るためには、もちろん聖霊がなければ交わりに与れない。聖霊の愛によって、父およびイエス・キリストの交わりに与る。そういう意味においては、非常に原始の事態は霊的な親密性を持っていた。

●キリストと一つ

ここのところでは、ヨハネ伝15章を開くとわかる。キリストとの交わりのことは、

「5**我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、**

多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。」（ヨハネ15・5）

「自分は幹であって、お前たちは枝である」

という。そしてしきりに、

「私に居なさい。私につながっていなさい」

と言う。ヨハネ伝15章の始めの方に、

「人もし我に居り、我また彼に居らば」

という、「居る」という字がたくさん使ってある。そして、その交わりの一番究極の状態がヨハネ伝17章なんです。17章になると、「交わり」が今度は「一つ」という言葉になる。

「21これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在し、我なんじに居るごとく、彼らも我らに居らん為なり、是なんじの我を遣し給いしことを世の信ぜん為なり。

「交わる」ためには、「の中に居る」ということがその根底であって、「の中に居る」ということが本当に「一つ」の事態になる。

22我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん為なり。23即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うことを、世の知らん為なり。」（ヨハネ17・21～23）

このヨハネ伝17章の21節から23節のところが非常に、「居る」だの「一つ」だのという言葉が使ってある。交わりの世界が一体化していくわけです。一体の関係。これはパウロが言っているとおり、「頭と体」との関係です。頭と体も外側から交わろうとするのでなくて、

「の中に居る」

という霊的な事態から交わりが自ずから生じているというのが本当のコイノニアです。

4これらのことを書き贈るは、我らの喜悦の満ちん為なり。

5我らが彼より聞きて、

「彼」というのはキリストのことです。

また汝らに告ぐる音信は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。

キリストがその光を受けとって、

「我は世の光である」

と。それから、

「汝らは光なり」

と、こうくるわけです。

6もし神と交際ありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理を行わざるなり。

「神の中にあるということがあれば、暗きうちを歩むということがないはずだ」ということです。「真理」というのは、時々申し上げているとおり、頭で考えられて理性で分かるような真理ではない。真理の実体であるところのキリストに交わり、キリストと一つになることによって、真理がそこに実証されてくる。真理を身証することだよ。

「真理を行わざるなり」とは、真理を身証することができなくなるということ。身体で証することです。

「真理とは、こういうことが真理だ」という、ひとつの事柄を考えてそれを行おうという、そんな二段構えのことではない。「真理」という言葉がとかく哲学的な、あるいは自然科学的な認識からいうとズレてしまう。福音の真理はそういう真理ではないですから。生きた真理です。真理を証していることが本当の真理の世界です。

●イエスの贖罪の血

7**もし神の光のうちに在すごとく光のうちを歩まば、我ら互いに交際を得、**もうはっきりそうしているね。だから、お互いに本当に光の中にあれば、交わりが自ずからそこに発してくる。

またその子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。これははっきりしているね。これが贖いですから。ヘブル書10章やゼカリヤ書13章にあるように血は即ち贖罪の血ですから、そのイエスの贖罪の血がすべての罪より我らを潔むという。

「罪の潔め」というと、何か相対的な罪が潔められるという、そういうことではない。我々の自我本位の、手離しで神・キリストに直結できないことを「罪」という。その罪の贖いとしてキリストは贖いとった。もともと、「贖い」というのは、「奴隷を身代金で買う」ことが「贖い」なんです。我々が罪の奴隷であるのを、キリスト自身の身代金即ちキリスト自身の血でもってそれを買い取ったわけです。神のものとして買い取る。神のものとした。これが「贖い」という本来の意味です。

旧約のいろんな事柄、パウロの「義」という言葉もそうなんです。

「信仰によって義とされる」という言葉は、もともと法律的な言葉ですから。福音の世界になると、信仰によって

「義と認められる」ことが今度は、

「義を与えられる」ことにまで展開していくことになる。

イエスの血がすべての罪から私たちを贖いとって、罪から解放されて潔められる。

8 **もし罪なしと言わば、これみずから欺(あざむ)けるにて真理(まこと)われらの中になし。**

「もし罪がないと言うならば」

と。そんなことはない。我々は神の似姿につくられているんだけれども、実はその実質を失ってしまったから、罪びとにすぎない。けれども、本来は神の似姿につくられている。そこに贖いによって回復されるわけです。しかし今度は、似姿の実質はどうやって得られるかというと、聖霊がくると似姿の実質が得られる。似姿の回復、パラダイスの回復が即ち、十字架・聖霊でくるわけです。

●自分をキリストの十字架の中に投げ出す

9 **もし己の罪を言いあらわさば、**

告白するならば、

神は真理(まこと)にして正しければ、我らの罪を赦し、

「罪を言いあらわさば、それで直ちに赦される」

と、そういう簡単なことではないですよ。罪の贖いは、贖罪によらなければ、キリストの十字架の血によらなければ、罪の贖い――別な言葉でいうと「罪の赦し」――はないわけです。罪の赦しは実は、事実は来ているわけです。けれども、罪の赦しが実際来ているのに、それを受けるためには、己の罪を告白しなくてはいかん。神さまの前に、

「申し訳ない」

と言わなくていかんと。

そこがカトリックでは、懺悔僧なんていうのがいて、懺悔僧に言うわけだね。プロテスタントは、我々はそんな必要はない。いきなりキリストに向かって言えばいい。人間お互いの罪びとがお互いに罪を言いあらわし合ったって、大したことはない。それよりもむしろ、キリストに直接に無条件に平伏(ひれふ)すときに――無条件の平伏しが告白だよな。いい加減な気持で告白したってダメなんだ――その時に「罪を赦す」とは、

「キリストの贖罪の罪の赦しの実行がそこにはっきりと受けとられる」

というわけだよ。赦しは既に来ているんだけれどもさ。告白が何ものかであって罪の赦しがくると思っていると、そうしたらば、その告白は大変なことになる。そういうことではない。

凡ての不義より我らを潔め給わん。10 もし罪を犯したる事なしといわば、これ神を偽者(いつわりもの)とするなり、神の言われらの中になし。

非常にはっきりしているね。ヨハネが罪のことをこれだけ徹底的に言ってます。そして、ここに

「イエス・キリストの血の贖い」

ということを言って、それが土台となって、その贖いを本当に受けとることで、キリスト

の血の贖いを、十字架の贖いを本当に受けとることと、自分の罪を告白することはもう表裏一体になっているわけだよね。

「罪を告白する」

ということは、もうひとつ私に言わせると、

「自分をキリストの十字架の中に投げ出す」

ことです。告白の言葉なんかなくたっていいですよ。投げ出しが一番、告白の具体的な姿かもしれない。それがその罪の告白というわけです。存在そのもので告白しているわけです。

この1章が素晴らしい内容を持っている。この1章自身がもの凄い福音です。御霊という言葉は出てこないけれども、この交わりがそういった御霊によってかなうわけです。

私は創世記を終わったら、パウロのローマ書くらいをやって、徹底的に福音の内実を講じてもいいかなとも思う。信仰は、ただ骨組ではないけれども、重厚な構造をしっかり持っていないとね。いろんな思想にぶつかったり、いろんなことにでっくわして、あわてたり、足が浮いてしまったりする。その点では、何といってもパウロは凄いですから。

●祈り

祈ります。

私たちの罪を十字架の血をもって贖いとってくださった主さま。御前にただ平伏すばかりであります。あなたの十字架で、すっかり過去・現在・未来のこの相対的な存在としての私たちは本当に、

「贖いとられてある、心配いらん」

と仰ってくださるから感謝であります。あなたの驚くべき聖霊の御生命、御光、真理そのものを無条件にくださるがゆえに、これを無条件にいただき、太陽の光を受けるごとく空気を吸うがごとく、私たちはあなたの生命を、あなたの御光を、吸ってまた貫かれて、

「汝らは我によって世の光である。汝らはどんなことがあっても腐らない塩である」

と。この御霊の光、御霊の塩でもって、私たちは塩付けにせられ、また発光体とせられて感謝であります。

この兄弟姉妹たちとこの福音の奥義をいよいよ身に体し、言葉でどうのこうのではなく、存在そのものをもって証人（あかしびと）といよいよさせられたく存じております。御光より御光へ、御生命より生命へ、また、あなたの驚くべきどん底の愛より愛へと、本当の意味における力より力へと、かく恵まれつつあなたの身証体とせられゆくことの何と素晴らしいことであるか。ただ御名を讃え奉るばかりであります。いよいよ私たちの感謝と讃美が、そのようなあなたの御恩恵のゆえにあなたを讃えることが、あなたを証することが一切であることがいよいよ明らかとなってきましたことを感謝いたします。

どうぞ、兄弟姉妹たちと供に、皆それぞれ一人びとりが課題と使命とを課せられていますが、それを果たしながら、福音のためには全く一つとなって、突き進ましめてください。

かくして、人間的な団結ではない、あなたがなしたもうところの有機体的な団結がそのようにして成っていくことを信じます。決して、単なるバラバラではありません。また単なる自己主張でも絶対にありません。どうぞ、そのようにして、それぞれのっぴきならない存在をもって、あなたをのっぴきならない角度でもって証して、大調和をなさしめたまわんことを切に願い奉ります。相助け、相祈り、相担いながら、進んで行きたく存じております。

この『無者キリスト』も全くその意味において、どうぞ、あなたの福音が、求める者、苦しめる者、悩める者、悲しめる者に、

「ああ、このような福音があるか」

ということを人々に伝えんがために、いかにもして私たちをして、そのことの一念のために尽くさしめたまわんことを切に願い奉ります。

兄弟姉妹たちはそれぞれみな人生の課題を担っていますが、あなたがすべての事態をあなたの御名を中心として展開していくことを信じながら、力を与えられながら、いよいよ進んでいくことを切に願い奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。